

入江長八 の 作品が残る

重要文化財「松城家住宅」の 塗壁について

その1. 松城家と住宅の概要

早稲田大学理工学術院
嘱託研究員

齋藤金次郎

●はじめに

松城家住宅は日本に現存する「擬洋風建築」の中でも最初期の個人住宅建築とされています。伊豆半島においては最も華やかで、この時代の象徴的な建物とも言えよう。擬洋風建築とは和風と洋風を混合した様式で建てることで、その様式は一見洋風ではあるが、いたる所に和風のデザインと技法を採用していることです。この擬洋風建築は大工棟梁達が横浜や神戸等の居留地などの洋館を見よう見まねでコピーをし、それに自分の創意を加えて設計して、たてた建物の事をいいます。即ち日本独特の建築様式とされています。技術的な特長としては、例えば天井の小屋組み（骨組み）には西洋式のトラスではなく在来の和小屋で作り、天井を張って、洋風建築らしいモチーフで仕上げる。また、壁は柱が見えない大壁仕上げとし、コーナーには伝統の漆喰を盛り上げ擬石風に見せ、窓廻りは蛇腹やくり型・半円形窓等で飾る。更にはバルコニーを設け、あたかも洋風建築に見せようとする事を指します。松城家住宅は平成18年に和風と洋風を融合させた、個人住宅としては我が国独特の擬洋風建築であること、また入江長八の漆喰鍍絵が残っていることなど創建当初の姿をとどめていることから貴重な明治期の文化遺産として、主屋・ミセ・土蔵他を含め6棟が国の重要文化財として指定されます。

松城家住宅は静岡県沼津市戸田（当初は田方郡戸田村）の川沿いにあります。戸田と言えば石材の産地であり、江戸城の建設に伴い、石垣や基石などにこの地の石材が切り出され、船で搬出され用いられたことでも知られています。松城家は代々主に廻船業を営んで財をなします。初代松城兵作は安政元年（1854）日露和親と通商条約の締結を求めて、500名以上を乗せたロシア船ディアナ号（2000トン）で下田に来航したおり、大地震による津波で沈没し、帰国ができないため当時のロシア船の提督プチャーチンが幕府に戸田村で代替新造船を造る事を願い出た

際に建造やそれに伴う諸物品を調達する幕府の造船御用係を勤める廻船問屋となります。また兵作はディアナ号沈没のおりには先頭となり、戸田村民一同と共に救助し、温かくもてなしたとされています。明治20年（1887）にはプチャーチンの娘オリガが、お世話になった返礼として松城家を訪ね宿泊しており、日露交流の場所ともなっております。一方、明治期には廻船問屋としていち早く蒸気船を買い入れ東京と貿易を行い、最有力資本家となり衆議院議員や県会議員を務めた家柄でもありました。

●住宅の概要と保存修理

松城家住宅は敷地中央に南面に面して主屋が建てられ、主屋東面南寄りにミセが設けられています。さらに、北面西端に文庫蔵、敷地境界には東土蔵及び北土蔵があります。また、現在は撤去や移築され現存しませんが明治当初までは、米蔵と醤油蔵があり戸田では大富豪家でした（写真-1）。建築年代は主屋が明治6年（1873）で、大工は地元の植田儀兵衛が行っていることが判明しましたが、他の建物については明確にできませんでした。しかし、2階南側廊下壁面に入江長八の漆喰鍍絵「雨中の虎」には、明治9年（1876）と明記されていることから、この時期に現在の建物は、完成していたものと思われます。

主屋は木造2階建てで、外観1階は真壁造りの和風とし、2階外壁は軒裏を漆喰長押状の蛇腹見切りを付けた揚げ裏とし、壁面は目地を入れた石積風漆喰塗大壁造（擬石塗り）りとなっています。また、南面にはバルコニーを設置し、南北面の窓廻りには漆喰蛇腹の枠を回した大窓やオーダー柱、西面には漆喰で作った半円形ファンライト付き鎧戸窓を設けるなど洋風の意匠を取り入れた、擬洋風建築となっています（写真-2.3.4.5）。一方、内部間取りは畳敷の和風が基本となっていますが、造作や意匠は洋風・和風・中国風の要素を組み合わせた空間となっています。中でも2階の天井一面のポルトガル製の幾何

